

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：13802
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：20H01039
研究課題名 抗癌剤による皮膚障害発現予測に向けた肌水分測定器による皮膚水分量・皮脂量評価

研究代表者

三浦 文美 (Miura, Ayami)

浜松医科大学・医学部附属病院・薬剤師

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000円

研究成果の概要：当院の臨床研究データベースを用いて、2007年4月～2020年3月にセツキシマブ(以下,Cet)を投与された患者(初回アレルギー発現患者を除外)155名を対象とした。皮膚障害に対し外用剤処方された患者は87.7%であった。Cet開始後に皮膚障害に対し外用剤処方がある割合は、予防処方がある群で82.8%、予防処方がない群で96.7%であり予防投与の重要性が示唆された。Cet開始後外用剤処方がある患者のCet平均総投与回数は27回、外用剤処方がない群は平均5回であり皮膚障害の発現がCetの有効性の指標となる可能性が示唆された。皮膚障害のコントロールが治療効果への寄与として重要と考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

抗癌剤による皮膚障害は患者のQOLを低下させ大きな精神的苦痛をもたらす。薬剤の用量規制因子となり化学療法投与可否の決定因子となる。現在、皮膚障害を完全に防ぐ方法は確立されていない。スキンケアが重要とされているが、水分量や皮脂量について示した報告はない。皮膚の水分量や皮脂量を測定し、皮膚障害の発現との相関関係が解明されれば、患者が皮膚測定器を用いてセルフモニタリングを行うことで、適切なスキンケアの実施が可能となる。皮膚障害がコントロール可能となれば治療成績の向上に寄与することができる。と考える。

研究分野：医療薬学

キーワード：抗がん剤による皮膚障害

1. 研究の目的

抗癌剤による皮膚障害は患者の QOL を低下させ大きな精神的苦痛をもたらす。さらに、薬剤の用量規制因子となり化学療法の投与可否の決定因子となる。現在のところ、皮膚障害を完全に防ぐ方法は確立されていない。そこで、保湿を中心としたスキンケアが重要とされている。しかしながら、副作用が発現していない段階で予防的投与の習慣を身につけることは困難である。また患者自身で、現在の皮膚の状態を外見だけで判断することも難しい。

保湿が重要とされる背景には、抗癌剤投与患者では皮膚が乾燥しやすく皮膚のバリア機能が脆弱化していることが挙げられる。しかし、具体的に水分量や皮脂量が数値としてどの程度低下しているのかを示した報告はない。現在、皮膚測定器が発売され自分で皮膚の水分量や皮脂量を測定することが可能となった。そこで皮膚障害の発現とそれらの相関関係が解明されれば、皮膚障害のリスクを数値で示すことができる。その数値を指標として、患者が自宅で皮膚測定器を用いてセルフモニタリングを行うことで、適切な薬剤選択、スキンケアの実施が可能となる。皮膚障害がコントロール可能となれば、化学療法を完遂することができ治療成績の向上に寄与することができると思う。

2. 研究の成果

まず、浜松医科大学医学部附属病院の臨床研究データベースを用いて皮膚障害の実態を調査した。2007 年 4 月～2020 年 3 月にセツキシマブ(以下, Cet)を処方された患者を対象とした。対象期間中に Cet を処方された患者 161 名であった。除外基準として Cet 初回投与時に infusion reaction を発現し投与中止となった患者を除外し、調査対象患者は 155 名とした。Cet 投与中に皮膚障害を発現し対症外用剤を処方された患者は 145 名(87.7%)であった。Cet 投与前に外用剤の予防処方がされた患者において、Cet 投与中に皮膚障害が発現し外用剤が処方された割合は 82.8%であり、投与前に予防投与がされなかった患者の 96.7%と比較して低い傾向にあり予防投与の重要性が示唆された。また、Cet 投与中に皮膚障害を発現し外用剤が処方された患者の総投与回数は平均 27 回であるのに対し、皮膚障害を発現せず外用剤を処方されなかった患者の総投与回数は平均 5 回であることから皮膚障害の発現が Cet の有効性の指標となりうることが示唆された。いかに皮膚障害をコントロールし Cet を継続するかが治療効果へ寄与する要因として重要と考えられた。皮膚障害発現の強さとの関連を解明するために、ハンドサーチでカルテ調査を行い Grade 評価について調査中である。

また、Cet 以外の皮膚障害の発現割合が高い薬剤についても同様の調査を行い、皮膚障害発現と治療効果との関連性について解明をしていく。

さらに、本研究においては患者のスキンケア及び患者個々の皮膚状態が抗がん剤治療における皮膚障害にどの程度寄与するのかを明らかにすることも目的としている。皮膚測定器を用いて患者個々の皮膚状態を数値化し、皮膚障害の発現とそれらの相関関係が解明することで、患者のセルフモニタリングの実施、適切な薬剤選択、スキンケアの実現につなげ、皮膚障害発現の高い薬剤における治療成績の向上に寄与できると考えている。現在、皮膚測定器を用い

た調査は予備調査段階であるが、今後まずは医療者が患者個々の測定を経時的に実施していき治療との関連性を調査し、最終的には患者自身が測定をセルフモニタリングで実施できるよう進めていきたいと考えている。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------